



筑紫女学園大学リポジット

Characteristics of Humorous Expressions in Chinese Contemporary Literature 「Anthology of Humorous Short-short Stories」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/118

中国現代文学「幽默（ユーモア）微型小説作品集」における ユーモア表現の特徴について

石 其 琳

Characteristics of Humorous Expressions in Chinese Contemporary Literature
「Anthology of Humorous Short - short Stories」

Kirin SEKI

前言

この30年来、中国では改革開放政策が続き、経済発展が進められる中、「世界の工場」から、「世界の市場」へと変身しつつ、世界的不況を背景に、国際的注目の的になっている。2010年 GDP は日本を抜いて、世界2位になると予想されているが、実際の庶民の生活実態からみればまだ開発途中国であるのも事実である。確かに中国国内の状況を見れば、いきいきとした活気が満ち溢れている。今後中流階層が増加することによって、社会における生活意識がレベルアップし、精神生活にも余裕ができ、生活に対する基盤的要求を超えて、文化芸術的需要がさまざまな形で増加しているのである。それを現わす最もわかりやすい現象とは、近年中国社会における文学出版業の好調だと考えられる。その出版業の中で微型小説（別名小小説）のジャンルに関して、その興隆現象がとくに目立っている。

出版界における「微型小説」ジャンルの隆盛理由について、中国現代文学の専門家は「微型小説」が持つ特別な性格にあると強調している。まず文体が短小であるため、現代人の生活リズムに適していること。さらに短い作品に加えて、精妙な文学的、芸術的表現方法が創作の要素として常に重要視されている点が重要なポイントである。

「微型小説」の発展と出版状況が大変盛んになっている事実については、これまで発表した微型小説に関する私の論文で既に触れているため、ここでは省略したい。本論はこれまでの研究に続き、「微型小説」というジャンルにおいて、さまざまな作品集に注目したい。その理由について、これら特別なテーマを明確に取り上げた選集には、その選別において、作家の作品内容がテーマの理念を含む要素があることを前提に、作品が選ばれ集められるのである。そして選集のテーマを考える際、必ず微型小説の創作要素を考慮したうえで決めるのである。よってこれらのテーマ別の作品集は、ある意味ではそれぞれのテーマが微型小説創作の重要な範疇であり、特徴であると考えられる。

これまでは微型小説の作品集について、私は既に近年出版された作品集「家庭作品集」、「廉政小説集」、「15人作家作品集」（注1）などの研究を行い、論文を発表したのである。今回は特に「微型小説」において、創作に欠かせない重要な表現の一つ「ユーモア」をテーマにした作品集を対象に、まず中国語の「幽默」（ユーモア）という意味合い、また作品におけるユーモア表現の特徴について考えてみたい。そこで本論はすでに出版された2冊のユーモア作品集を考察の対象とする。

第1章 中国「幽默文学」の理念と歴史背景

さて、「ユーモア作品集」の内容を見る前に、まず中国におけるユーモアという概念の歴史的成立背景と現代的な位置づけを考える必要がある。一般にユーモアという概念は西洋生まれであると考えられているが、中国においては決して完全な舶来概念ではなく、古来より既にある意味での伝統が存在していると考えられる。さらにその伝統的伝承が現代のユーモア概念と深くかかわり、中国における「幽默(ユーモア)文学」の創作表現にも多くの影響を与えている現実がある。以下はこの点について説明するため、まず西洋生まれのユーモアの原義と概念また中国における「幽默(ユーモア)」の言葉の意味合いと派生背景について、簡単に説明を加えたい。

(1) 西洋のユーモア理念の由来と意味

ユーモアについて、どの百科事典を調べても、およそ次のような定義と説明が明記される。現在英語は *humour* と書くが、国の言語によって相違する。(フランス語 *Humeur*、ドイツ語 *Humor*) その原語はラテン語の *Humor* であり、古代生理学では人間の性格、気質を決定する体液だった。体液の不均衡により、特異気質の人が生まれ、16世紀イギリスの劇作家ベン・ジョンソンには、特異気質の人たちを描いて笑いを誘う作品を *comedy of humours* として多くの創作がみえる。今日ユーモアと言われる「諧謔」あるいは「有情滑稽」の意味は、近世ヨーロッパ文学、とくにイギリス文学に生まれ、「滑稽」の意味合いに、知的な機知、意志的な風刺に対して、感情的なものとされている。

ユーモアの定義についても様々な論議が存在する。単なる「笑い」、「滑稽」とは違い、哀しみの要素が混じり、複雑で極めて矛盾に満ちたものであるとの考えがある。さらに1906年フランスのイギリス文学者 Louis Cazamian (1877 - 1965) には、ユーモアについて厳密に定義できないと主張する論文もある。

実際に日本の明治期、欧米哲学を初めて日本に紹介した井上哲次郎は英語 *humour* を日本語の「性向」、「滑稽」、「諧謔」、「俳趣」の言葉にあてている。明治20年代からの作家、翻訳家の坪内逍遙は日本語にない「ユーモア」を使い、明確な定義はしなかったが、今日までこれが一般的呼び方として定着したのだと言われている。

上述した内容からも理解できるように、ユーモア概念には派生当時から、すでに曖昧さを持ちながらさまざまな理念が混じり、具体的に厳密に定義することには困難さがあつた。そこで漢文教養の伝統が深い日本の状況において、積極的に西洋思想を取り入れる明治時代から、この概念を受容し、中国語同様「滑稽」、「諧謔」などの言葉と意味合いを「ユーモア」にあてはめようとしたが、結局外来語という方法で日本語の「ユーモア」として書き、言葉を定着させたことから見ると、中国における「幽默」(ユーモア)概念の形成過程にも同様な問題背景を抱えていることがわかる。そしてこれは中国の「幽默」概念を理解する重要なポイントであると考えられる。

(2) 中国語の「幽默」(ユーモア) 言葉の形成と意味合い

「ユーモア」中国語では「幽默」と書き、*humour* から音訳された言葉である。その概念の由来について、専門家の中では、中国戦国時代の楚国の政治家、詩人屈原 (BC343 ~ BC278) によるものであるとの説があるが、一般的には単に *humour* の訳語であると考えられている。

「幽默」という中国語の発生について、1924年5月23日中国現代の高名な文学者、言語学者、評論家である林語堂（1895 - 1976）が《晨报副镌》に文章を発表し、humourを「幽默」に訳す理由について、おおむね次のように語っている。『「幽默」は全くの音訳で、単純に思いつきであり、特に深い意思はなかった。しかし humour は『笑話』と訳すわけにもいかないし、『詼諧』、『滑稽』との意味合いも異なっている。もしその意味合いを重視して訳すれば『風趣』、『詼諧』（作者または作品の詼諧風格）にすべきであろう。いずれにせよ直接音訳して、誤解を招かずに済む方が適切ではないか』と。その後、彼の訳によって、humour の概念は、中国語「幽默」とともに、中国社会に定着したと見られる。そして林氏の「幽默」は、日本語のユーモア同様既成の漢字の語彙を使わずに、新たな「新語」としてその概念を成立させたのである。林氏は翻訳するにあたり、言葉としていくつか中国固有の概念を候補に挙げている。その中でも特に注目したいのは「滑稽」の概念である。以下はこの点について検討する。

(3) 「幽默」と「滑稽」概念の関係

林氏がユーモアの訳語を考えるにあたり、「滑稽」という言葉を候補に挙げている。日本でもこの点に関して、同じ過程を踏まえた事実がある。実際現代中国ユーモア文学の表現特徴を検視すると、滑稽概念と深く関わっていると考える。「滑稽」は笑いをとる表現で、世界に共通する概念であり、文学現象としても共通性をもっている。人間社会のマイナス的部分を笑いで誘い、表現し、観衆または読者に啓発を与えるのである。

中国は古より、「滑稽」の概念が既に存在している。歴史書《史記》において作者司馬遷が「滑稽列伝」を設けて以来、「滑稽」という美学的範疇と理念は、中国文学作品の創作において、固く定着し始めたのである。司馬遷当時「滑稽列伝」で描写された人物たちは、封建時代の支配者の傍で、機敏な言葉を発し、怪しげな体の動きをとって、帝王たちの笑いを誘うのが仕えの目的であった。司馬遷は「滑稽列伝」の中で、登場人物たちに対し「常に談笑をもって諷諫する」と称賛している。これはまさに「滑稽」の形態を持った「笑いの芸術」であると考えられる。

長い歴史の歳月において、《史記》の後、5世紀に劉勰が著した有名な文学理論書《文心雕龍》には、「諧隱」篇が設けられている。「諧隱」の表現には「會義適時」「振危釋憊」でなければならないと明言している。文章はそもそも立国の大事業であるという価値観は、早くから知識人の中で認識されたため、その後、中国歴代の知識人たちは文学の目的について、風刺、批判などの価値を定めるのは、社会に対する重要な責任であると考えられている。文学理念と趣旨について、「滑稽」、「諧隱」の概念がたびたび文学評論のテーマとして触れられ、これらのジャンルの文学表現には「笑い」を持って「匡時濟世」（時弊を正し世を救う）でなければならないという理念は定着されたのである。

20世紀初め、生活が都市化され、印刷技術の進歩、新聞産業が発達したため、通俗文学の興隆風潮が巻き起された。なかでも笑いをとりいれた現代の「滑稽文学」がとくに流行した時期があった。これは西洋のユーモア概念も同時に浸透し始めた時期であるため、当時においては、「滑稽」、「風刺」と「ユーモア」の相違性についてよく注目され、多く議論がみられたのである。

研究資料によれば（注2）中国現代の「滑稽文学」の表現範囲には伝統の世俗生活と庶民心理の反映であるため、「通俗的」風格と趣が常に現われている。描写内容は、庶民の日常生活の色々な現実である。20世紀40年代に入り、生活文明化による生活の都市化が進むなか、「滑稽文学」の

描写内容と表現宗旨は依然として市井の庶民生活が中心であった。

西洋の「滑稽ユーモア文学」の起源も庶民的、世俗的現実と密接に関係があったことも注意せねばならない。西洋の滑稽概念の由来は、喜劇と密接に関係していることは一般に認識されている。喜劇は古来ギリシャ農民たちの収穫祭の神祭りの儀式である。滑稽的仮装娯楽を行うのが主な内容であり、滑稽の対象は必ずしも風刺の対象であるとは限らない。滑稽自体が醜い象徴であり、内面では遊び心が多く存在する。しかし上述した中国の滑稽概念には、帝王たちに対して諷諫する目的をもつ趣があり両者は相違する。

これまで中国においてのユーモア概念の由来および言葉の成立について説明し、さらに西洋的概念ユーモアの派生の経緯と概念の曖昧さを簡単に触れたのである。以下は中国のユーモア感覚に従来の「滑稽」概念との関わりを重要視せねばならない点について、具体的作品と作品選集の編集主旨を通して考察する。

第2章 中国現代幽默微型両作品選集の編集趣旨と理由について

この章において、二つのユーモアをテーマとする微型小説の作品選集を対象にその編集趣旨と理由を検討する。ここではまず2作品集の出版情報について説明する。

作品選集①「中国当代微型幽默小説選」 凌鼎年 主編 2002年8月 上海人民出版社

作品選集②毒不死の狗（毒殺できない犬） 《微型小説選刊系列精華》（幽默卷）

鄭允欽主編 2003年1月 百花洲文藝出版社

両作品選集はともにユーモア表現をテーマにしている。編集の時期について、約一年未満の期間中に前後しているだけで、ほぼ同時期に出版されたものであると考えられる。編集理由や背景については、各編集担当の責任者である主編者が作品集の前言で説明を加えている。ここでその編集前言または序文の内容を踏まえながら、それぞれの編集趣旨をみてみたい。以下は作品選集①、作品選集②として述べる。

(1) 作品選集①の編集理由と趣旨について

まず主編者凌鼎年氏は作品選集①の編集理由について、「近年各出版社から総合的微型小説作品集が出版されている。ただし愛情、青春、少年向け、郷土などのテーマはあるが、ユーモアをテーマにした作品集だけはなかった。ユーモアは読者に最も好まれるテーマであるし、ユーモア作品の選集を出版することに決めたのである。」と説明している。さらに凌氏は、この作品集の序文に「生活にはユーモアが必要である」というタイトルを付けている。その内容には、中国における「幽默」の言葉及び西洋ユーモア原語の歴史的形成的背景と意味合いの変遷について、簡単に考証し説明を加え、同時に作品集編集の理由及び問題の提起をしている。以下は凌氏の序文に取り上げられたユーモア作品の発展にまつわる重要な問題点を考察する。

問題点①：ユーモアの発展は政治環境と関係する

ユーモアは政治、社会に対する風刺が主な表現条件であるため、政治環境が緩和、清明であり、そして多元的文化の社会背景が存在する状況さえあれば、ユーモア精神が最も発展できるのである。封建王朝時代に滑稽を演じる俳優たちは存在したが、しかし彼らは帝王に笑いを持って諷諫する際、実に命がけなのである。これは20世紀中国の文化大革命時代と同じ状況である。当時は隠れ

た末端社会の口伝ものによって、いわゆるユーモアは表現されてはいるが、およそ「政治的笑話」が中心であると凌氏は考えている。中国におけるユーモア精神と政治情勢とが密接に関係することを主張している。

問題点②：現代社会の生活にユーモアは欠かせない

近年中国社会において、ユーモアが各地で大流行している。舞台、映画、テレビ、写真、絵画、詩歌、小説の創作など芸術的ジャンル範囲も広く多様化する中、多数の作品が生まれているのである。西安に《喜劇世界》、広州の《快活林（愉快的森）》などユーモア文学作品を専門に発表する文学刊物があり、多くのユーモア文学作品の創作者を育成しているのである。現に毎年旧正月の大晦日のTV番組には「春節晩会（春節ショー）」があり、それには必ず笑いの演出節目が用意されている。この事実から、凌氏は生活にとって、ユーモア精神が欠かせないということは、ほとんど共通の意識であると分析し、ユーモアの内容は、笑いには欠かせない条件であると述べている。「幽默」（ユーモア）とはただ笑わせるだけではユーモアとは言えず、涙笑いの後に強い思考が記憶され、悟りがあることが大事である。ただ下ネタのような低俗な笑いは、「ユーモア」とは考えられないと強調している。これはユーモアの内容が社会において一般化され、多様化されることにより、格調の高さが求められることの重要性を強調したのである。

問題点③：ユーモア理念の流れ傾向について

一般に中国人は西洋人のようなユーモアに欠けていると考えられている。凌氏はこの点に関して、これまで中国ではユーモアに対して偏見が持たれている。そしてユーモアを発展させる土壌がなく、正しくユーモア意識が評価されていないからだという考えを述べている。

この問題に関して、魯迅（1881 - 1936）の著作に、この問題の論議がみえる。彼の著書《南腔北調集》の「論語一年」に「幽默（ユーモア）」は中国においてあり得ないことだとの内容があり、さらにユーモアの内容自体が国産ではないし、中国人もユーモアを表現することは得意ではないと言い、当時の社会背景においてもユーモアする余裕のある時代ではないので、ユーモアと思っても、その実態はすでに変容されてしまい、社会的「風刺」へと偏ってしまうのだと語っている。ほかに魯迅の《且介亭雜文二集》に「風刺は何であろう」、《準風月談》に「滑稽例釈」、《南腔北調集》に「小品文の危機」の文章において、当時の中国社会が「幽默」、「滑稽」、「風刺」概念についての誤解と混用に対して批判している。研究資料（同注2）によれば、以上の論点から魯迅のユーモアに対する基本的考えがうかがえ知れる。ようするに中国には純粋なユーモア概念は存在しないのである。中国の激動する時代と社会において、人々はユーモア精神をもつ余裕すらなく、また許容される社会環境もなかったのである。中国では「風刺」だけが存在する、中国の社会的現実自体こそが可笑な世界であり、笑いの資料になるのだ。「風刺」とは、自然と芸術の手法を使って、中国の現実を描写することである。中国の伝統的滑稽文章は軽薄、狡猾と猥褻であり、真の滑稽ではない、真の滑稽には「抗争」と「激憤」が含まれなければならないと分析している。当然このような論点は当時の世界情勢における中国の卑微な立場から生まれたものであり、社会状況が現在とは大きく異なる背景によって生じた考えである。当時は中国語のユーモアの訳語「幽默」という言葉が成立する時代と近い現実もあり、これまでの「幽默文学」創作の流れに強く影響を与えたことは事実であり、無視できないと考える。

問題点④：ユーモア概念の文化との関わり

ユーモアには必ず各国の歴史、文化などの要素も含むため、各国のユーモアの表現形式が異なる

こともあると凌氏は言う。彼は序文の中で、中国の詩などを引用して多くを提示したが、ここでは中国古来特有の通俗文化の「対聯」(注3)を一例に説明する。その「対聯」の内容は、ある理髪店に「雖曰毫末技術卻是頂上功夫」(毫末な技術とは言え 頂上の技であるのだ)である。「毫末な技術」と「頂上の技」を対句させ、毫末であるがトップ(頂上)であるのだというユーモアさにあふれた対聯である。このように言葉の意味合いをもとに、上手にユーモアさを醸し出すことには、文化的要素が必要条件であろう。そのほかに中国の「歇後語」(注4)、「民間俚語」にも言葉を持ってユーモアさを現わす形のもが多くみられると述べている。これは例えば日本人のお笑い俳優がアメリカに進出したい時、アメリカの政治、歴史または社会現象、時事問題などを多くの要素を取り入れなければ、笑いがとれないのと同様であろう。要するにユーモアは笑いの要素に人間世界の共通する感情であるが、時には文化という壁があることも存在するのだと彼は主張するのである。

以上のような問題点に対する認識からは、この作品選集①がユーモアに対する解釈と理解が明らかになったと考える。

(2)作品選集②の編集理由と趣旨について

作品選集②の編集理由と趣旨について、主編者鄭允欽氏は選集の「出版前言」に次のように述べている。中国の微型小説は20世紀80年代より文壇から台頭し始め、毎年作品の数が数万編ある。当時微型小説を推進するに有力な《微型小説選刊》の責任者であった鄭氏は、《微型小説300編》の編集後に大変な人気を受けた状況を見て、300編に選定した作品は1997年末までのものであり、その後発展状況の隆盛は継続しつづけ、作品の数も相当数に上っているし、読者のニーズを考慮して、佳作を集め選集を編集することは重要であると考えたのである。市場調査の結果、読者の多面的需要がある現実に対して、微型小説を6分類し、系列ものとして出版したのである。その分類は①**哲理巻** ②**ユーモア巻** ③**風刺巻** ④**情愛巻** ⑤**家庭巻** ⑥**幻想荒誕巻**の内容である。

この作品集の出版に関して、6つのテーマに分類される方法からユーモアの理念がうかがえ知れる。まず前言の内容にある注目点を検討する。

その1：6つのテーマの分類は並列なもので、それぞれ単独に作品集として出版されている。要するに《幽默巻(ユーモア)》の作品集は系列の中において、ひとつの独立した作品集である。

その2：《幽默巻》はほかにある《風刺巻》、《哲理巻》、《幻想荒誕巻》の3つのテーマ作品集と区別して出版されている。

この2点から、編集趣旨として、「ユーモア」という概念は微型小説の創作要素として認めているものの、その表現の特徴には、「風刺」、「哲理」または「幻想荒誕」の理念または表現手法に相違があることを主張していることが知れる。

第3章 両選集における編集方式と作品選定の相違性

ここで両選集における編集方式と作品選定の相違性を同時に検討するのは、作品集の編集にあたって、作品の選定基準に必ず創作理念が考慮されていると考えるからである。

(一)選集①の編集方式について

ここで作品選集①の編集方式について、以下その内容に触れたい。

1. 内容によって分類する

作品集①はユーモアをテーマにすると同時に、創作表現の相違性によりさらに細かい範疇に分類されている。その内容は①人情世態 ②美しい衝突 ③甘酸っぱい風景 ④神の鞭を揚げよう ⑤動物物語 ⑥名篇新話 ⑦港台澳烟雲となっている。この7分類は、作品の内容を考慮したものあれば、別の理由で分けた部分もあると考える。

7分類において、最も一般的範疇として考えられるのは、「①人情世態」類と「③甘酸っぱい風景」類である。両方とも世相を描写している作品であるとタイトルからその内容が知れる。そして「⑤動物物語」は、同じ世間人情を描写するなかで、「動物」と関わる物語を中心とし、動物が重要な役として登場する内容が条件である。例えば、「鬪鶏試合」、「魚と仏」、「すっぽんの話」、「犬、猿、人」などの作品があり、内容についてはタイトルから描写の方向性が理解できるであろう。そのほかの「②美しい衝突」と「④神の鞭を揚げよう」の項目については、実際の作品のタイトルを一つの分類タイトルとして起用されたのであるため、その作品を検視しなければ、この分類の趣旨がわかりにくいのではないと思われる。そして「⑥名篇新話」の項目については、タイトルが示している通り、既に周知の人物伝、昔話、寓話などをアレンジしながら新たな思考を取り込むように創作された作品を集めたものである。最後に「⑦港台澳烟雲」の類の設定について、凌氏の作家としての微型小説界における業歴が重要な背景であると考えられる。

2. 分類法と編集者との関係

主編者凌氏は中国を代表する微型小説の専業作家の一人である。青年時代の文化大革命期間中、当時危険視された対象、つまり家族に海外関係があったことにより、批判され、苦難な生活を送った経験をもつ。このことは彼のその後の人生に多大な影響をおよぼしている。1990年華僑とかかわる仕事をもち、94年中国の作家協会に参加し、15年間世界各国アメリカ、カナダ、フランス、シンガポール、マレーシアなど欧米とアジア地域合わせて17か国の新聞に約500編の作品を発表している。そして1994年凌氏の作品は世界華文微型小説の最高賞を受賞したのである。以来彼はシンガポール、タイ、マレーシア、フィリピンに前後4回にわたり、世界華文微型研究学会に招かれたのである。その後中国国内の微型小説（小小説）界の出版物《微型文学》、《小小説月刊》、《小小説作家》などの顧問を務めるのである。彼は作家として微型小説の創作において、常に海外の創作環境及び微型小説作家と関わりをもち、海外の作家たちの創作を意識し、視野に入れ、微型小説界の国内外の活動の中心的な役割を果たしてきたのである。さらにこの作品集が出版される約10年前に、《世界華文微型小説大成》という作品集が既に出版されている。現在微型小説における中国語（華文）の創作は、中国現代文学の領域において、華文地域を全体的に捉えることも多くみられる。よって、今回このユーモア作品集を編集する際、「⑦港台澳烟雲」という中国語地域である香港、台湾とマカオの作家たちの作品も集めたのであろう。

(二)選集②の編集方式について

第2章で述べたように市場調査により、シリーズで作品選集を編集し出版したのがこの作品集の由来である。編集方式についての注目点を検討する。

1. シリーズものとしての編集方式

出版元は既に微型小説に関する出版物の実績があるから、今回の作品集はこれまで《微型小説300篇》に収録された作品をすべて省く、90年代中期以後のものを集めている。編集方法は初めより創作の内容と特徴をもとに、6つのテーマに分け、シリーズものの一巻として出版されている。シリーズ各巻ともに内容において、さらに細かく範疇を分けることをせずに、選定した作品だけを配列する形態を取っている。

2. 作品後に短評を加える

作品選集を編集する際《微型小説300篇》の観点と方式を維持して、読者の理解と鑑賞度を高めるため、大多数の作品の後に精短な批評を加えている。この短評についてここでは問題にしないが、編集方式としての特徴であると考ええる。

3. 各巻のタイトルに作品名を使用する

この作品選集シリーズは全6巻ものとして編集されている。各巻の名称について、6巻それぞれ異なるテーマ「哲理」、「家庭」、「風刺」、「幽默」、「情愛」、「幻想荒誕」で分類されているにもかかわらず、直接テーマの名称を使用することなく、各巻に収録された作品の中から一つの作品を選んで、その作品の名称を各巻のタイトルにつけている。この編集方式には、作品の選定理念に深くかわると考える。この点に関して以下で検討する。

(三) 両作品集における作品選定理念の相違

中国においてのユーモアの表現には風刺の理念が特に強く含まれると選集①の主編凌氏は考えている。彼は上述の序文にこの作品選集を編集する理由を述べた後、改めて「幽默」の意味について、「素質」であり、「含蓄」である。「哲理」であり、「心智」である。「表述方式」、「処世行為」であり、「文明の表現」であると強調している。更にこの作品選集①に選定された作品は、風刺あり、調侃（からかう）あり、荒誕あり、冷やかなユーモアあり、ソフトなユーモアがあると説明を加え、読者は笑い、怒り、涙泣き、思考するか否か、本当のユーモアと見るかどうかは読者の判断に任せようとする考えを述べている。

選集②の編集者は作品の選定基準について、特に選集①のようにユーモア理念をどのような基準で選定するかは明言していないが、作品には「思想性」、「時代性」、「文学性」と「可読性」の4つ基本原則が選定条件であると述べている。そして上述編集趣旨からも理解できるように、シリーズものとして最初から「幽默（ユーモア）」が「風刺」、「哲理」及び「幻想荒誕」の理念と区別している。また選集②は90年代中期より2001年末までの作品で、作家たち全員が優れた実績の持ち主であると強調している。

両者の作品選定の理念を比較すると、選集①の凌氏が「ユーモア」に対して「風刺」と「哲理」などの理念も含む観点であるが、選集②のユーモアに対してかなり狭く定義されているように考えられる。この点を検討するには、選集②の編集者鄭允欽氏の創作歴について触れる必要がある。もともと鄭氏は童話作家で、1984年より童話創作を始め、中国作家「児童文学賞」を数回受賞する経歴をもっている。1993年《微型小説選刊》の主編に就任し、個性的特徴のある編集手腕から、当時一般に文学刊行物不調の状況を一転して好調にさせ、膨大な経済効果を生み出したほどである。鄭

氏は微型小説の創作に「小」、「巧」、「新」、「深」、「奇」の要素を重要視しているが、この要素には童話創作の発想に通じるものがあると考えられる。微型小説の創作を分類するにあたって、完全に大人の感覚である「哲理」、「風刺」の表現が理屈を重視する傾向がある反面、「ユーモア」は特に童話創作の要素、ソフトで奥深い、穏やかな表現を要求することにより区別されたであろう。

だが、両作品選集において、「ユーモア」の定義が一致しなくても、実際に収録された作品を検討すると、そこにはユーモア概念の表現にはやはり共通するものがみられる。要するに、中国的ユーモアに対する既成概念が作品には共通して表現され、その特徴が表現されていると考える。以下は具体的に両作品集から作品を取り上げ、この点に関して考察を進める。

第4章 作品のユーモア表現の特徴について

この章においては、具体的に作品を検討しながら、その創作におけるユーモア表現の特徴を考察する。まず作品集②のタイトルに選ばれた作品「毒殺できない犬」を見ることにする。この作品を検討の対象にしたのは、この作品は作品集②《ユーモア巻》のタイトル作品であり、《ユーモア巻》の代表作だと考えたからである。作品のタイトルをみれば、既にユーモア的な雰囲気を読者に匂わせている。犬を毒殺したいのに、死なすことが出来ないという裏に、何が隠され、暗示されているのかを、読者にその滑稽さを感じさせ、首をかしげつつも笑いが誘えることを見込んでいる。以下は作品の内容を簡単に説明する。

作品1 《毒殺できない犬》（陳永林 作）

あらすじ：主人公の青山が畑仕事から戻ったら、庭に鶏の死体がいっぱいあった。また村長が飼った犬の仕業だと彼は憤慨した。この犬が村民が飼っている鶏をいつも死なすのは日常茶飯事のようになっている。青山家は普段1、2羽の鶏だけやられるが、今日は十数羽の産卵鶏もやられてしまったのだ。妻はその酷い光景に気絶してしまった。青山は「しょうがない、ガマンするんだ」と妻を慰めるが、妻はもうこれ以上ガマンできないと鶏の死体を袋にまとめて、村長のところへ行こうとしたが、青山はすぐに「村長と喧嘩すれば自分たちもここにはいられなくなると」妻を説得して家に連れ戻した。そして村長の犬を毒殺しようと考えたが、見つければ大変なことになる。もしかしてほかの誰かが毒殺してくれるかもとひそかに期待していた。村長の犬は鶏だけ狙うではなく、青山の家に入って食卓のおかずも勝手に食べていた。青山は我慢の限界に毒薬を買って村長の犬を毒殺する計画をたてた。ところが、青山の家に来た犬は既にほかの家で毒薬を食べて狼狽な姿で死にそうになっていた。慌てた青山は妻と犬を救い、自分の家で毒殺されたことを避けようと必死に犬を救った。これで村長から感謝され今後も村長に頼み事があれば役に立つと考えた。犬は起死回生した後も相変わらず村中でやりたい放題の悪事をやり散らかした。村民たちは青山が犬を救ったことを恨んでいた。犬はその後青山の家には害を与えなくなったが、青山は犬を毒殺する考えは止めなかった。妻は自分の家にはもう被害を受けなくなったから毒殺しなくてもいいのではないかと呟くが、青山は未だに村民が被害を受けているのは事実だと反論した。そして、あの事件後、青山が犬を毒殺するとは村長も疑わないからと考え、毒入りの肉まんを犬に食べさせた。しかし翌日犬は生きていた。今度は村民の牛二が慌てて自宅の前で倒れた犬を救ったのだ。青山は今度こそ村長は自分のことを疑いはしないだろうかと心配で不安に落ち、犬を救った牛二を憎んだのだ。

作品後の短評で、作品には次の3つの意外な展開が仕組まれたと指摘している。

その1：青山はがまんの限界に達し、やっと犬を毒殺することを決心する。薬を購入し、門を開いて誘う、しかし犬は毒殺のまえに自宅の前で倒れたのである。この想定外の展開が読者の好奇心を引き起こし、続きを知りたくなるであろう。なぜならすでに「もしかすると、他の誰かが犬を毒殺するかもしれない」と青山が憤慨する妻を説得するセリフがこの光景を発生する前に書いてあり、読者に暗示したのである。

その2：青山は村長の犬を毒殺したい気持ちが作品の主な展開線であるが、しかし実際犬が自宅の前で泡を吐く悲惨な姿で倒れているのを見て、逆に犬を救ってしまった。その理由は「もし村長の犬が我が家の前で死んでしまったら、村長に犬を毒殺したと疑われるに違いない。」そして「もし私たちが犬の命を救えば、村長からは感謝されるだろう。」と2句のセリフで、農民的狡黠と中国人的阿Q精神が表現されたと指摘する。

その3：青山は犬を毒殺しようとするが、今度は牛二が犬を救った。牛二が青山の悲劇を再現したのである。青山の犬を救った行為を、村人が彼の根性のなさとするならば、牛二の救助が滑稽で、ユーモアであり哀れであると考えられる。この毒殺できない犬からは権力の抑圧に怯える人間像と失われた人間の尊厳に対して、作品を味わいながら反省すべきであろうと批評する。

以上の三点は、短評の視点であり、ユーモアに対する解釈が含まれている。ここで特に注目したいのはその2と3についてである。

まずその2について、短評では2句のセリフを取り上げ、農民的狡黠と中国人的阿Q精神を描写していると指摘するが、これは上述した、中国特有なユーモアの表現であると考えられる。「阿Q精神」というのは、第2章で触れた魯迅の有名な小説《阿Q正伝》の主人公阿Qの愚かな生きざまを示唆している。この小説に阿Qのような最下層の人間を主人公にし、それを滑稽的に活躍させ、農村社会のさまざまなタイプの人間の思考と行動の様式を浮き彫りにして描写している。阿Qは常に怯えながらも「おいら、むかしは おめえなんかより、ずっと偉かったんだぞ。おめえなんか、なんだってんだ！」と自己主張する。(注6)敗北をたちまち勝利に変える姿勢、弱い者に負けても、相手をロクでなしと考へ、心の中では相手より優位に立つとの精神的勝利法が「阿Q精神」とよく言われている。またその後「阿Q精神」が中国人の精神思考の愚かさを批判する議論の代表的対象にもなっている。《犬を毒殺できない》作品において、その2で取り上げたセリフからは、青山という人間の思考行動に、阿Qの影が重層的に具現されたと考える。

その3について、ここで注目したいのは、牛二が死にそうな犬を救った意外な展開である。牛二のこの行動には、青山が大きなパンチを食らったようであるが、笑わせる展開であろう。青山はやっと犬を毒殺する一大決心をしたにもかかわらず、牛二の小心者の行動により、彼の尊厳と村で英雄になれるかもしれない存在感が全て泡のように消えてしまう。「何だ、この結末。」と読者がっかりさせて、苦笑いしながら、なるほど犬は毒殺できないのだと納得する。さらに後味として、彼らのような哀れな存在に対して、悲しさが湧き出すであろう。

この作品は末端の無知と弱さを描写の素材にしなが、社会風刺的要素が滑稽さを混じえて表現されている。創作において、「ユーモア」的表現は「風刺」する要素も含むが、「風刺」を重点的に創作するよりソフトに表現しなければならない。同作品選集のほかの作品の短評にこのような説明があったことから、この作品集②が《風刺巻》の作品と一線を画して、《ユーモア巻》の作品のユーモア的表現の特徴性を明らかにしたと考える。

次は選集①「人情世態」分類で最初に取り上げている作品《アヒルの面白話》を見る。

作品2 《アヒルの面白話》（喊雷 作）

あらすじ：ある日、食品課の朱課長夫人は田舎の親戚からもらったアヒル2羽を厨房へ持ち込み、炊事員の趙さんに絞めて料理するように頼んだ。趙さんは雄アヒルはやせすぎで、肉付きが悪い。雌アヒルはもうすぐ産卵するため、殺すのはもたない、ここに置いて残飯で飼ってみようと提案した。夫人は喜んでお願いした。しばらく経って、趙さんから毎月朱課長宅に30個の卵が届くようになった。月日が経ったある日、夫人は課長に趙さんはアヒルの卵を毎月一日も欠かさずを持ってくるし、好人のようなので、今度彼を新しい買い付け人に推薦すればと提案した。そこで趙さんは推薦されたとおりに買い出し職についた。後任の丁さんは前任の趙さんの言うとおりにアヒルの面倒を見ることになった。が毎朝アヒルは卵を産まないのだ。彼は趙さんの嘘がわかり、朱課長へ言いつけようとしたが、よく考えた末、彼は月に60個の卵を朱課長宅へ届けるようにした。夫人は不思議に思うと、アヒル2羽とも雌だったと彼はいう。この事実から趙さんの誠実さが疑われ、すぐに買い出し職から更迭され、後任は当然丁さんだった。その後アヒルの面倒は艾さんに変わった。アヒルはやはり卵を産まなかった。艾さんはどうとう課長夫人に事実を報告した。課長夫人はアヒルがいまになって卵を産まないことを不思議に思い、アヒルを家に連れ帰り観察することにした。翌日あいにく夫人がアヒルのおしりを触って卵を探っている時、田舎の親戚が課長宅へ来てその光景に遭遇した、

「このアヒルはどうした？」と不思議におもい夫人にたずねた。

「卵を産んだかを？」と夫人が答えた。

「何をおかしなことを言っているんだ。これは私が連れてきて殺して食べるためのアヒルじゃないか、あれは2羽とも雄だったから、卵なんか産むわけないだろう？」

この作品は世間に最も多くみられる現実を描写している。30個、60個の卵を届けて騙そうとした趙さんと丁さんの愚かな行動は、滑稽であり、極めて荒唐である。しかし騙される側の課長夫婦も被害者にはほど遠く、私的利益をもって公職任命の権限を濫用している。意外なところで死の運命から逃れ、悠々と生きていた2羽の雄アヒルの目には、人間の醜い貪欲さがおかしく映ったであろう。作者は全ての主人公の思考を冷やかなユーモアで表現し、風刺しているのである。両選集①と②には、庶民的視点で捉え、権力へ対抗する無力さを訴える作品が多く見られる。中国社会のユーモアに対する感覚は、上述したように、特に風刺的要素が重要視され欠かせない点に特徴があると考える。この点について、さらに作品を取り上げてみたい。以下は選集②の2番目に収録された作品を見ることにする。この作品は200字未満の最も短い作品である。2番目に収録されることは、それなりに注目すべき点があると考えられる。

作品3 《リクエスト》（李勤安 作）

あらすじ：ある日テレビのリクエスト番組の女性司会者は美しい声で語った「県人事局の劉局長、今日はあなたの還暦の日です。公安局勤務のあなたの長男、検察院勤務の次男、裁判所勤務の三男、工商局勤務の四男、税务局勤務の長男嫁、人民銀行勤務の次男嫁、工商银行勤務の三男嫁、建設銀行勤務の四男嫁及び県政府に勤務の娘からあなたの養育恩恵を感謝するため、《大きな木》の歌をリクエストしています。あなたの福は東海のように深く、南山のように長寿することを祈っています。」

この作品には短評がなかったが、人事局長とその家族の勤め先を司会者からさりげなく長々と

語っている描写は、理屈なく権限乱用に対する風刺がうかがえ、他者に憎たらしい感情を掻き起こされるであろう。現実にはありうる話ではないかと疑うほど、冷ややかなユーモアを感じさせ、読者の笑いを誘えるだろう。また政治的腐敗に対する庶民の無力さを訴えている。

さて、次は明らかに滑稽、荒誕の内容で構成された作品を取りあげてみたい。この作品は上述選集①作品の分類「④神の鞭を揚げよう」のタイトルの代表作《劉五の神鞭》作品である。この分類は他の分類と違い、タイトルを見る限り分類された作品の理念が全く理解できないため、この作品を取りあげたいと考えたのである。

作品4 《劉五の神の鞭》（張玉庭 作）

あらすじ：ある町で映画「劉五の神鞭」は三日間公開しただけで、爆発的大人気になった。このドラマはカンフーの内容であり、主役の劉五は侠客で、武術が高く、特に彼が使用する神鞭はどんな武術よりも優れ、観衆をびっくり仰天させるのだ。そのわけは、劉五の神鞭は、映画スクリーンから飛び出して、観客に撃中することもある。例えばあるお金持ちの観客が夢中で見ているうち、突然鞭が彼に向かって打ってきたのだ。またある政府要人が映画に見いている最中、神鞭が突然彼の頭に振ってきて帽子をふっ飛ばしたのだ...このように、街中が大騒ぎになった。神鞭に打たれた人々は、次々抗議して告訴し始めた。関係部署から映画の撮影、制作過程などすべて捜査をしたが、異常は見つからなかった。このことでさらに町は混迷な空気に包まれた。こんどは関係部署の課長が謎解きのために自ら動き出した。彼は直接映画館へ劉五の映画を見に行った。映画は開演して突然神鞭が飛び出して、課長へ直撃したのだ。結局、この案件は解決できなかった。ある若い記者はこの事件をこっそり取材していた。続けて追跡調査した結果、答えは明らかになった。劉五の神鞭に投げ打たれた人たちは全員共通して収賄、脅迫、悪商法、詐欺などの犯罪事件に関わっていたのである。記者は真実を披露し、町全体が憤慨と興奮にわいた。神鞭劉五を神様だと映画の主題歌も大流行になった。

ユーモアという理念をこの作品に託したものはなんであろう、庶民社会における不評不満が権力の壁を突破して倒せと願っているのであろう。この分類に収録された作品を検視すると、およそ官僚界に関わる腐敗話が多いのである。ユーモア小説の範疇にわざわざこのような分類を設けたのは、やはり政治、社会への風刺がユーモア理念に欠かせない重要な要素だということを示唆している。

結び

そもそも微型小説（ショート・ショート）の発生について、ロシアの作家トルストイは文章に、欧州の中世時代に、カトリックの教会の外と封建主の城の隙間に挟まれた狭い町に住む庶民たちから、宗教と封建主に対して多くの辛辣な笑い話を作りだした。これはルネサンスと資産階級第一世代のひよこである。ルネサンス時代の小説家がこのような笑い話を文学の形式で発展させ、17世紀にまた生活と政治的熱情をこの文学（ショート・ショート）に注ぎ込んだのであると分析する。「辛辣な笑い話」は人間世態を風刺するが、ユーモアは欠かせない。「微型小説」の芸術形式は実に多様性に富むのだが、その芸術的表現に最も多くみられるのはやはり「ユーモア」、「風刺」の手法である。

中国の歴史は、古より平和と幸福に恵まれることが少なく、庶民社会、特に貧困下層の現実では、

常に権力に抑圧され、教養レベルが低いことによって、生活には悲惨さと哀れさが満ち溢れている。西洋的ユーモアの観念は特に宗教的背景の要素がある。中国的ユーモア観念が初めから政治的背景の要素が強かった点であり、発端の相違性があっても、表現する上では、笑いの芸術として、風刺意識が欠かせない点では、それほど差はないと考える。ただ中国の場合、特にこの要素が強くなる歴史と社会背景があることを重要視せねばならない。

作品選集②のように、「ユーモア」が「風刺」と別格に扱われるにも関わらず、本論が取りあげたいいくつかの作品は、絶対的「ユーモア」表現の代表作であるとは言えないが、しかし各作品が両選集において、それぞれ重要に位置づけられていると確信できる。これら作品の表現と創作理念には既成のユーモア観念を取り込みながら、政治と庶民社会を中心に、その滑稽さを笑いで描写し、笑いの背後に憤慨と風刺が隠されて存在するのが共通した傾向であり、表現の特徴性であると考えられる。

現在中国は、政治的経済的に大国になりつつ、世界中の目線的になったとはいえ、もちろん多方面において複雑な問題を抱えているという現実がある。改革開放が中国にもたらした理念は、中国を世界へと考えるが、21世紀最初の10年が終わろうとした今、中国は世界と融合し、あらゆる方面において世界との共存を考えなければならない。《ユーモア微型小説》の作品は、時代的にその社会の現実が「ユーモア」的視点から反映できることは貴重であろう。選集①の編集者凌氏がユーモアは「文明の表現」と言ったように、これからは生活水準の向上により、余裕のあるユーモア感覚がもっと中国社会に浸透できるであろう。

注釈

1. 既に発表した論文は筑紫女学園大学・短期大学研究所年報第20号及び紀要第1、3、5号などを参照。
2. 《中国現代滑稽文学史略》第10章「中国現代滑稽文学與歐美滑稽幽默文學，新文學諷刺文學之比較」を参照。
3. 対聯とは対句を2枚または3枚の紙に書き分けて、入口、壁面、神棚などの左右または上に分けて貼って内容にはめでたい事を書くのが一般的であるが、時には時世を風刺する内容もある。
4. シャレ言葉の一種で、最後の文字を隠し、その意味を暗示する。
5. 《阿Q正伝》第2章「勝利の記録」(竹内好訳 岩波書店)より

主な参考文献

中国現代滑稽文学史略	湯哲聲著	1992	文津出版社
阿Q正伝・狂人日記	魯迅作 竹内好訳	1981	岩波書店
世界華文微型小説大成	江曾培主編	1992	上海人民出版社
江曾培論微型小説	江曾培著	2008	上海文藝出版社
極短篇の理論與創作	張春榮著	1999	爾雅出版社

(せき きりん：アジア文化学科 教授)